

2006年出土の木簡

(13)	□□ 子首□□ □	091	(25)	戸主□□□□ □ ^{〔上カ〕}	091
(12)	□ 金万呂	091	(24)	□ ^{〔山カ〕} 戸主□□□□ □□□□	091
(11)	□□ ^{〔佐カ〕} □□	091	(23)	大初位	091
(10)	二田造□□ ^{〔塩カ〕} □□	091	(22)	□□ ^{〔丈カ〕} 長十五	091
(9)	進正七	091	(21)	卅八	(115)×14×4 019
(8)	正八位上羽昨□	091	(20)	□ ^{〔高向〕}	(65)×(20)×3 081
(7)	家地□ ^{〔鳥カ〕}	091	(19)	赤末呂	091
(6)	□地損破板屋一間	091	(18)	連族□□	091
(5)	四坊刀祢□	091	(17)	□ ^{〔伴々〕}	110×14×5 051
(4)	• □□ ^{〔奉出〕} □□	(64)×(8)×2 081	(16)	□□ ^{〔兵〕} □□	091
(3)	• □□□□□□□□ ^{〔大蔵カ〕} □□□□□□□□ ^{〔司カ〕}	(159)×(7)×2 081	(15)	□□ ^{〔疾二〕}	091
			(14)	畝火□	091
				土坑SK七〇七二	

(26)	□戸廿四	091
(27)	□五十三	091
(28)	少女□	091
(29)	□ ^{〔疵カ〕} □□□	091
(30)	自□ ^{〔者カ〕} 百方□	091

紀年銘木簡はないが、(8)(9)(23)から八世紀初頭の木簡群とみられ、内容は出土地点でもある右京に関わるものや、籍帳類など官衙で使用される用語が目立ち、右京職関係の木簡の可能性がある。

(1)の表面は「符す。零の物持つ」と読み下せる。七世紀末から八世紀初頭にかけての正史には、ほぼ毎年雨乞いの記事がみられ、そのいずれかの行事に関連しよう。裏面の「冊人」は、雨乞いの儀式に要する物を運ぶための人数を記したものか。(2)は右京職の上申木簡。二文字目の字体は「京」。(3)(4)は直接接続しないが、同一簡の可能性はある。上部官司へ物品を搬出する際の記録であろう。

藤原京の坊名は、これまで「林坊」「軽坊」「小治町」などの固有名で知られていたが、(5)は坊を数詞で表す貴重な事例である。他に「坊」と書かれた削屑二点も出土している。また藤原京に「刀祢」が存在していたことを示す点でも重要。五文字目は「五」の可能性

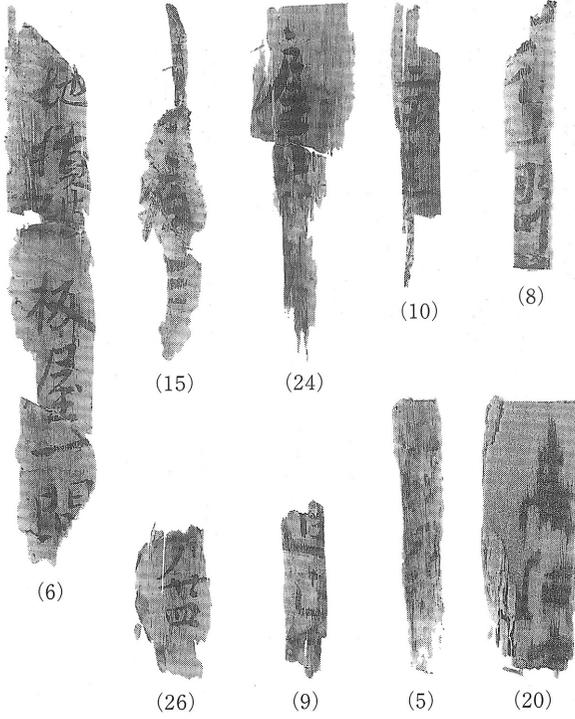
があり、「刀祢」が坊の中に複数いた可能性もある。

(6)(7)(22)は家屋などに関係し、他に「長」「高」など、大きさを記したとみられる削屑もある。(6)は破損した家屋を書き上げたものか。大倭国では、慶雲二年(七〇五)に大風で廬舎が損壊したという記事がある(『続日本紀』同年七月丙午条)。(8)の七文字目は縦画のみしかみえず、「臣」にはならない。(9)は正七位とみられ、おそらく「進」は「少進」の「進」であり、(2)と関連させれば京職の四等官と考えて差し支えない。

(10)～(13)(18)(19)は人名を記したものの。このうち(10)は、大化五年(六四九)三月に蘇我倉山田石川麻呂の頭を斬った物部二田造塩と同名か。時期はやや離れているが、同一人物の可能性もある。(20)は比較的大きな字体で文頭から書き始めているので、高向某への上申文書かもしれない。上半部のみ残る三文字目は、「中」などの字。(14)の「畝火」は、右京に位置する畝傍山の畝傍、あるいは人名なら、天平勝宝七歳(七五五)に右京班田司の算師畝火豊足(『大日本古文書』編年文書四、八一頁)などがある。

(16)は横材木簡。横材の出土は計六七点にも及び、「衛」「宮」「田」「八」などの文字が認められる。(15)(21)(24)～(28)は戸籍などに関係し、(21)(26)(27)は年齢を記載したものであろう。

また本調査区周辺の同坪内からも、「年六十三」「下戸」「雑戸」「百濟手人」などの戸籍関係や、官人などを召喚する召文木簡が出



(竹本 晃)

(二〇〇七年)

奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』二二
九二年
奈良文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』二二一(一九

9 関係文献
土しており(本誌第二二・二四号)、当地に右京職関係の官衙が置か
れていた可能性が考えられる。